

津田昇平教話 第十八話

令和三年一月十八日 朝の教話

神様にも信心して、ほれこめ。実の一心に思
いこんでみよ。何事も、おかげは思いこみ一
心からかなうものなり。

おはようございます。令和三年一月十八日をお迎えさせて頂きました。

昨日は、広大なおかげを頂きたいと願いましたら、おかげというのは、

「金光きんこうる」と言われる天地の神様に真まことを向けて供えたら、その光に照

らされて影は自分の方に映ってくる。だから大きな真を供えたら大きな影ができる。小さな真では大きな真のような影は映らないから、しっかりと神様に大きな真を供えてくれよということを、教祖様は仰ったんですね。そういう信心を求めさしてもらおうということでした。

その中で教祖様はどういう信心をしたらいいかということで、一つには「真を供える」というふうな表現で仰っておられましたし、別の方に對しては「神様にほれ込む」というふうなことをよく仰っておられたり

しましたね。教えの中で少し引用しましたら、

「うじこ氏子、ほれるということは、じゃらじゃらしたことのようだが、これは実に結構なることであるぞ。ほれたとなると、ほれた人のためには、たとえ自分の命が果てるとも、火の中、水の中でもいとわぬと思うものである。

(中略)大工、左官、職人ならば、親方にほれよ。親方にほれたら、何でも親方の言うことをよく聞き、おうちやくけ横着気のないものなり。そうすると、親方もこれを見て、この弟子は実に横着気のないやつ、何でもよく言うことを聞くやつじゃ、かわいいやつであると思う。そして、ほめながら

かわいがり、何でもこれには早くしこんで教えてやりた
いと思ひ、つい、うまい物でもあれば、やる気にもなるも
のなり。

また、神様にも信心して、ほれこめ。実の一心に思いこん
でみよ。何事も、おかげは思いこみ一心からかなうもの
なり」

〔理 I 鳩谷古市 三より抜粋〕

とありますね。少し紐解いてみましょう。

「^{しんじ}氏子、ほねるといふのはじゃらじゃらしたことのよひ」……じゃらじゃらというのはちゃらちゃらといふことでしょね。ほねるといふとやっぱり当然、一般に言ったら、ちゃらちゃらといふくらいですから、恋愛のようなイメージでね、若い子がするようなイメージもあるかもしれませんね。当時もそういうのがあったんかもしれないね。「じゃらじゃらしたことのようだ、実に結構なことである」、「^{しんじ}氏子」って仰ってますから、神様が氏子に言われているんでしょね。で、「ほねたとなったら、ほねた人のためには、たとえ自分の命が果てるとも火の中水の中でもいとわぬと思うものである」と、こう仰るんですね。最後の方にも出てきますけど、「神様にも信心してほねこめ」。結局これが言いたい

ことなんですよ。神様と氏子という関係で言われていますから、神様にもほれ込みなさい、と。誰たれに言ってるんかと言ったら、「氏子」と最初に出てますから、「氏子、ほれる」ということはじゃらじゃらしたことのように、神様にほれ込むということ、これは実に結構なこと。神様にほれたとなると、ほれたお方のためにはたとえ自分の命が果てるとも、火の中水の中でもいとわぬと思うものである」ということを仰ってますね。

「大工、左官、職人なれば親方にほれる」、親方にほれる。これまではまあ言ったら、恋愛のようだったかもしれませんね。「ほれた人のため

に「って。じゃあ今度は、職人の話になってきた。大工さん、左官さん、職人さん。親方にほれて、ほれたら何でも親方の言うことをよう聞いて、横着おうちやく気もなくなつて、そうすると親方からも、これ見て「かわいいやっちゃん」と、「よう聞きくやつやな」と。で、ほめながらかわいがり、何でもよく早はやう教えたら、つい、うまいもんでもあつたらやろうかいなという気になるもんだと。

恋愛という形のほれるであろうと、職人という形の、その親方にほれるであろうと、何でもほれるということは意味のあることやと。神様と氏子という関係っていうのは、親様ですから、職人であつたら「親方」といいいぶつつにして言いひひからいいですから、「親」が付つくんですよね。それにし

たつて親神様、人間の命を授けて下さった授けの親様ですから、この「親方にほれよ」、「そういうほれ込んで信心したら、神様の方も」、「かわいいやっちゃん、こいつは」というので、でも神様が「こうするんやで」「ああするんやで」と仰ることをあんまり聞かんかったら、あんまりかわいげはないかもしれませんなあ。

そやけど、何でも言うことをよう聞いて、横着気もなくて、めんどくさいなあとかね、そういうのがなくて、何でも「はい」「はい」と、一生懸命じゅうじつけんめい言われたことを、言ったら神様の仰せのことをしっかりと守らして頂こうと思うて、横着気も出さんと頑張がんばってたら、「おお、かわいいもんやな」と、そりゃ親神様も思われる。

で、ほめながらかわいがって、早くおかげを授けてやろう、早く教えて信心しておかげを授けてやろうとして下さる。で、ついええもんがあったら、おかげでも何でも、うまいもんだけじゃないでしょうけど、何でもおかげを授けてやろうかいなあいう気にもなる、と。「神様にも信心してほしい込みなさい」と、結局はその信心のことを言いたかったわけだね。教祖様はね、別に恋愛話をしたいわけじゃなくて、参ってきた氏子に対して、「信心も同じで、神様にほれ込むということがとっても大事なんや」と。そのために参ってきた方に対して、「ほれるということはこちららちらちらしたことのようにだけでも、そんなことはないで。ほれたらあれやこれやとめんどくさい気にもならないで一生懸命なるやろ」と、

「そんなふうに信心してみ」と。「そんなふうに信心したら、神様ほれ込まれたら、『ああ、かわいいやっちゃんあ』と思つて、いろいろあれもおかげこれもおかげ、あれも教えたらあれもさしてやる、これも食わしてやる」と、いろいろ思つやるうう「言つて、」同じやからな」と、やっぱり「神様にほれこみや」ということを教祖様は仰りたかつたんでしょね。神様にほれ込んで信心するというのは、相手は神様で、私たちはただの人間ですから、人間なりに一生懸命ほれ込むということが大事やなあと思つてですね。ここで「ほれた人のためには」というのは、好きになつた、ほれた人ということなんでしよう、男女で言つたらね。「たとえ自

分の命が果てるとも、水の中、火の中いとわぬと思うものである「ってありますけど。

以前に、まあずいぶん前ですけど、若い女の方がね、お参りをされたことがあって、信心の話をさしてもらって、お参りしたり、だんだんと信心するようになってきて。お参りをするというのが、その方はちょっと遠かったんですよ。遠かったんですけど、最初のうちは何とか足繁く通っていたけども、だんだんおかげ頂いて楽になってきて、そしてお参りするということもなんとなく、おかげも頂いたしということでも、少し離れがちな部分があったんですよ。でも神様から、「遠くても、やっ

ぱり時間を作ってもお参りさしてもらって、神様に会いに来さしてもらうんやで」「って話をしておりました。その方が二十歳はたちそこらやったと思いますけど、

「先生、神様どこにでもいらっしゃるんでしょ」
と聞くもんで、

「そつやな」
言いつつ。

「どこに行っても神様のお体と仰いましたよね」

「うん、どこに行っても神様の中を分けて通ってるんや」

「じゃあ、私が東京に居ようが福岡に行こうが北海道に行こうがアメリ

カに行こうが、神様いらっしやるんですよね」

「うん。そう、そのとおらや」

「だったら、わざわざここに会いに来なくたっていいんと違いますか？」
言いつて。

「うん、まあな。理屈で言ったらそうなんや。そやけど、あなたが拜んでる神様言つたかてな、ここに祀まつらせて頂いて、あなたがここに縁頂いて、神様、ここにお祀りされてある天地金乃神様、天地金乃神様どこでもそうやけど、私がここに座ってるから、私という人間が、金光大神取次者こんこうだいじんとりつきしやが現す神様のところにお引き寄せ頂いたんや。家の近くにも教会はあるやろうけど、そこやなくて、わざわざこんな遠いところまでな、引き

寄せて下さった。同じ神様やったら、千六百か七百か教会があんねんや
ったらやな、どこでも一緒ごっしょやないか。でもそうじゃなかったやろ。神様
はわざわざこんな遠いところまでな、足を運ぶように連れて来てくれは
った。それで実際おかげ頂いたんやけど、じゃあどこでもいいんやっ
たら、どこの教会でもいいやないか。近くに教会ある言ってたやないか、
そこでもいいんやないかという話やけども、そういう訳やないんやな、
と。それはその近くの教会のその先生が現す天地金乃神様と、他の教会
の先生が現す神様と、そら同じ神様祀っとってもその神様を現す力とい
うのがある、それは『守もり守もりの力』と教祖様は言いはってなあ。守もりの
持つ神様を現す力、これ、神様を現す力が神徳しんとくですけど、そういったも

のがあるから、先生のところにこうしてご縁頂くというのは、結局どこに行っても神様は神様やけど、私という人間が、尼崎教会の津田昇平とつだしみさへいという先生が、守りが現す天地金乃神様、先生の命を出口として立ち現れる、御座おわします、立ち現れるね、そういう、その神様でないとおかげにならないということやな。だからまあ、どこでもいいっちゃどこでもいいんやけど、かと言って、前はしっかりとお参りできたの、』最近はまだおかげ頂いて、しんどいこともないしもいいや』というんじゃ、そらなあ、神様に対してあんまりなところがあるからなあ。ぼちぼちお参りさしてもらったとき。あんたもめぐりが深いから、ちょっとこれでおかげ頂いたと思ったらあてが違うから、しっかりと信心するためにお参りはさし

てもらった方がいいよ」

と話をしたんです。そしたらその方は言うんですよね、

「でもなかなか遠くって、お金がなくて」

「いや前もそうやったやないか。それどころか前より今アルバイトもできようになってきたしやな、病院にも通わんでいいようになったしな、借金の返済も神様のおかげ頂いたし、今の方が金があるやないか」

「ああそうですね。いやでも時間がなくて」

「いや、時間がないって、前はもう寝たきりの状態だったり、学校にも行けんかったけど、今は学校も行けるようになって、行けるようになったからってお参りに行く時間がないっていうのも変な話やな。おかげ頂

いてるからこそお礼参り大事にさしてもろうたらいいんやけどなあ」

「いやでも、土日はもう疲れるんです、先生」

「そうか。まあそうかもしれんけどな、そやけどな、疲れたからもうやめとくわって言うんじゃなあ。そらなあ、神様だってあなたを助けるの大変やったんやから。そらなあ、疲れることもあるかもしれんけど、やっぱり時間を作って参らしてもらって会いに来たら、親神様は喜んでくれはんねんで」

って言うて。

「お金もかかるでしょ」

「そりゃ参る方がお金かかるけどな」

「うーん、だからねえ」

とか言うんですよ。まあそうかいと。

「会いたいわって、神様思ってたっしやるっ？」

「うん、思ってたはる」

「だったら写真で、私あの、このお広前の写真を、先生のホームページもあるし、それ見て私拝んどきますから、それでだめですかね」

とか言うから、

「まあそらだめかどうか言うたかて結局、何がだめということはないけど、結局あなたの神様へのほれ込み方というのは神様見てはるからなあ。

うーん。『鐘かねは打ち割る心でつけ。太鼓たいこはたたき破る気でたたけ。割れも

破れもせぬ。ただ、その人の打ちよう、たたきようしだい。天地に鳴り渡りてみせよう』と言うけど、例えばで、あなた遠くても会いに行くのが嫌っていうふうにして、大変やって言うけどな、あなた信心は神様にほれ込むことやっていうふうに教祖様仰ってるんやけど、あなた神様の立場になってみ。ほれ込むんやから。あなた彼氏はおんねんやろ」

「あっ、います。できるようになりました」

「そうや、もともとあなた彼氏もおらんやったやないか。そやけどおかげ頂いて、学校にも行けるようになって、彼氏のひとつもできてありがたいやないか」

「ありがたいです、だから忙しいんです」

「まあそうかそうかもしれん、そやけど」

「それに先生、二人にも三人にもデートしようって言われて、モテてるんです」

「結構なことやないか。じゃあその彼氏ができたりデートに誘ってくる人ができたりって結構なことやけど、もし仮にあなたが神様の立場になったとしたら、ほれ込むということになったら、ほれ込んでくれる人の方があなただってええやろ」

と言ったら、

「それはいいです。好きと思ってもらえないよりは、好きと思ってもらった方がそれは私も楽しいです。気分もいいです」

「そりゃそうやろね。神様だって一緒やないか」

って言うんですよね、私は。

「じゃあ、しつう聞くんげどね」

言っしつ、

「あなた遠いと言っけど、もし彼氏がやな、『もう遠いから会いに行くのが嫌やな、めんどくさいな』言ったらどいしお」

「いや、それは悲しいですね」

「そやろな。『遠いけれど、でも会いたいから会いに行くわ』と言った

「ら

「そら嬉うれしうですわね」

「そやろ。同じ相手でもやね、同じAさんでもやな、『忙しくてしんどい、大変やけど、遠いけど会いに行くわ』というAさんとやな、『遠いからもうちょっとやめとくわ。会いに行くのもえらいしな、ちよっとやめとくわ』というAさんやったら、あなたどっちの方が真まことが大きいと思うかいな」
「言った、」

「そりゃ、遠くても会いに行こうというAさんの方がいいですね」
「やっぱらそやろ。そっちの方が真まことが大きいからそやなやで」

「ああ、そうですね」

「じゃあ、『疲れたわあ』言いつて、デートの約束してたけど、久しぶりに

会えるなあと楽しみにしてたけど、『ちょっと疲れたからやっぱり今日はやめとくわ』言うて、朝、電話がかかってきた。どう思うっ？」

「いや、もう残念ですね。もうちょっと嫌ですね」

「でも、相手疲れてんねんで」

「でもねえ、疲れてても会いに来てくれた方がやっぱりねえ。絶対に無理してまでは、血はい吐いてまでとは言いませんけど」

とかどうとか言うてましたよ。

「そやろ、疲れてるからもう会う気はないわというのと、疲れてるけれども少しでも会いたいわと思って、顔だけでも見たいわと言って会いに来てくれる方がそら嬉しいやろ」

って。

「そろそろですね」

「そろそっちの方が真が大きいんやで。真が大きいから、あなたは嬉しいなあと思うねん。彼氏が仕事してて、忙しくて時間がなくなって、でも夜に、まあ言ったら仕事も帰りが遅かったとしようや。相手が年上で、あなたの彼氏はいくつや」

って言うたら、もう社会人なるとかなんとか言っていましたよ。

「じゃあもう忙しくってね、夜帰ってきてても十二時くらいになると。じやあ、今度会う予定にしていたけれど、でももう帰ってくるのも遅いし、会いに行こう思ったら朝早いし、身体もちょっと、週末でね。一週間ず

っとそんな調子やったらだいぶくたびれてるから、忙しくて疲れてる。『時間もないから、でも顔だけでもいいから、トンボ帰りかもしれんけど、それでも顔が見たいなあと思うから、新幹線乗って会いに来るわ』っていうのんと、『いやもう忙しくて時間もないし、くたびれたから、顔はまた今度でいいや、もうちょっと休むわ』というのと、どっちが嬉しい?」

　　って言ったら、

　　「まあ何したってやっぱりそりゃ、ちょっと無理してでも会おうとしてくれた方が、そら嬉しいですよ」

　　「うん、まあな。そらそっちの方が真が大きいからな。で、相手の人はい

くつや」「、まだ社会人になって一年目ぐらいやった。

「そんなにお金があるわけでもなく、そんなにないと思います、一人暮らしをしますけど」

「そりゃなあ、お給料だって頂いてるかもしれないけど、そこまで余裕があるわけでもないやろ。でもお金がかかるけれども、それでも会いたいなあと思うから、あなたに会いたいと思うから行へわいと言いつてくわえたら、どう思う？」

「それは嬉しいですね」

「会いたいけどお金がないからやめとくわ、と言われたらどう思う？」
「それは悲しいですね」

「そやる。それはそっちの方が真が大きいからやで」
って。

今の時代やったらね、その当時ですからLINEとかなかったですけど、写真があったりしましたんで、まあメールくらいはありましたよ。メールがあって電話があったから、それでいいかと言ったら、まあそうかもしれんし。何にしてもこう、「真まことってというのは神様への一筋さひとすぢ」って昨日申しましたけどね、そういうものがやっぱり大事になってくるんですよ。で、そう、その人にもう一個なんか言っただな。

「例えば、あなたの誕生日に、年に一度の誕生日があったとしよう。そ

の日は会いたいとあなたは思って、せっかくお祝いしてくれんのやった
ら。でも、彼氏は土日のお休みで、ちょうどあなたのお誕生日は土曜日
曜日やし、わざわざ会いに来てくれて、ホテルのディナーでも予約して
くれたり、あるいは誕生日プレゼントでも用意してくれたりして、来て
くれたら嬉しいうれいやるなあ
言ったら、

「そりゃ嬉しいです」

「でも年に一度のあなたのお祝いの日やと思うても、仕事も大変やし、
お金もかかるし、だいぶ疲れもたまってるし、行っても次の仕事もある
からもう早はよ帰りたいし、行ってトンボ帰りになるかもしれんけど、い

や、会いたいののは会いたいんやで、って。会いたいののは会いたいねんけどお金かかるやんか、うーん……って言われんねんやったら、どない思うっ？」

「そんなんやったら会いに来んでもいいですわ
って言うてましたね。」

「でも、口で言うてることは一緒やねんで、その人と。いやー、好きなんやねんけどなー、会いたいんやけどな。そやけどちょっと疲れたから、いやちょっとお金もかかるしな、もう眠たいし仕事もあるし次の日の勉強もせんといかんねん、テストもあるんや、試験がな。会社の中でもあるんやで」

とか言いながらねえ、

「でも、どんなに時間がなかっても、忙しくても、ま、体力もきつくって
もね、それでも時間を作ってあなたに会いたいと思ったり、なげなしの
時間でも時間を作って、誕生日プレゼントどんなんやったら喜ぶかな、
こんなんやったら喜んでくれるかなあ言って、あれこれ考えて少し買わ
してもうって、で、わざわざ持って来て、たとえトンボ帰りになるから
数時間食事して終わるかもしれんけど、それでもわざわざそこまでして
くれたということがあったら、それだけの真があるからやっぱりあなた
嬉しいやろっ」

「そりゃ嬉しいですよ」

「神様も一緒一緒やねん」

「神様も一緒なんですか」

「そうや、神様も一緒。もっと言ったら神様がそうやから人間もそうやねん。人間と同じというんではなくって、人間が神様と一緒にやねんで。

人間は神様の子で、神様から分け御わ霊みたまというたましいを頂いとんねん。

神様の御心みこころ、身体だけやなくて、神様のものさしを頂いとるから、それ見た時に神様が感じるところを、あなたの分け御霊様も感じとるんや。

ああこれは真があるな、これは真が薄いなとか、こっちの方が真が大きいなとか。逆にここまで無理せんでもいいんやけどな、でもその気持ちにはありがたいなあとかね、同じことだな」

言つて。

「あくまで気持ちの問題は気持ちの問題やけれども、気持ちというものは形にも表れてくる。それを『真心』まごころと言つけど、真心が形になって『真姿』ますがたになるけど、でもそれを真として神様は受け取って下さる。何もまあ血はい吐いてな、倒れ込んでなのに、何も無理して来てもらう、そんなことはせんでもええわ。神様だってそんな無理せんでもいいと仰るし。質屋に入れて借金してそれで会いに来ようとか、いやそこまではせんでいいと仰る。

でも、そこまでしてでもお参りしたら、参って来ただけのおかげは頂けると思いますがね。まあ要するところ、神様にほれ込むということ

で考えたら、あなたは苦しい、しんどい時とかは、『神様に会いたい、会いたい。ここが一番です。どこに行っても呼吸ができませんね。でもここやったらホッとできるなあ』言って、『もう大学は、歩いて数分の大学は遠いけれども、何時間もかけて来ることは、この教会は、お広前ひろまえは近いです』って言うたり、あんなだけ言うてたけど、おかげ頂いて楽になって、できなかったものもできるようになって、頂けなかったはずのおかげも頂いて、彼氏の一人も二人もできて、ああ楽しいわあって言うてる矢先に、あんなだけおかげ下さった神様のところにお参りするのはいずれこれや理由つけて言うて、それ真がちょっと少ないんちゃうか」
って言うたら、さすがに笑って

「そうですね、ちょっとダメですね」

って。そこで本人なりに気付いてえらいなと思うんですけどね、そこからまた、

「本当ですね、仰ってることよく分かりました。でも神様って人間とおんなじなんですね」

って言ったから、

「いやいや、人間が神様に一緒やねん。だって神様の子やから。神様という、天地金乃神様、天から御霊みたま、地から肉体を分け頂いているから、それが人間やから、神様とおんなじ物差しやから、だから神様が喜ぶようなことってというのは人の心にもかなうんや。人の心になうから神様に

かなうって、「ああ、神様も一緒なんや」じゃないねん。神様がそうやら、人間も、神様の子である人間もそうなんや。だからある意味、人との関わりの中で、こないしたら喜びはるということを分かったら、神様がどないしたら喜ぶかっていうことだって分かるはずなんやって。そんなむつかしいことあらへんなあ」
って。

その時でもその女の子にお話したのは、神様にほれ込むということについてね、このみ教えを話した記憶があります。広大な広大なおかげって言うけれども、やっぱり昨日の教えですけどね、「真まことに映る影、神様

に対して真が大きい方が、自分が受け取ることが出来る影も大きくなる」
って。「『あなたのいろいろ大変なところ、これだけおかげ頂いたって言
うけど、これでもう全部もう大丈夫と思ったたらこれ、あてが違うんやか
らな』言ってる。それまで熱心に、近くの学校にも行けなくっても、週にい
っぺんでも、そんなお金があるわけじゃないかもしれないけど、一生懸命、
これまで貯金してきたお金を崩くずしてでも、わざわざお参りさせてもらっ
たら、結構なことやと。だからそれに合わせておかげも下さったし、今
はアルバイトもできるようになったし、前よりお金もできてるし」

アルバイトとはいえ、結構なお給料もらえるようになってましたんで
ね。その分お参りさせてもらっても、全然それでも十分に遊べる。勉強

やら、ちょっと遊びに行くお金だってあるくらいはできてましたよ。身体だってね、その当時の方がもっと大変でしたから。

「そう考えたら、本当に今おかげ頂いて、おかげ頂いてるからこそ、いろいろなことをさしてもろうてる。でもおかげ頂いてから、信心強うならんといかんはずなのに、おかげ頂いたらあなた信心が弱なつとるやろ。それは神様に対しても相済まんことやで。こんだけおかげ下さってるのになあ。おかげ授けるのも大変や。だから授けたおかげを落とさんようにするためにちやっぱり、ここまで頂いてきたおかげを忘れんようにするために、お礼参りは大事やし、こっから先もどんなことがあるや分

からんから。でもお参りしてお取次とらじ頂いて、そうしながら日々の生活の中で神様と一緒に生活してたら、何かとおかげ頂けるから。だから時間がないとか忙いそがしいとかって、理由はいくらでもつけようと思ったらつくれるけど、そやけどあんまり薄情はくじやうなことせん方がいい。おかげ下さったんやから、本当やったら一生かかっても頂けんようなおかげを、あなた頂いてるんやから、それを思ったたら、一生懸命精出して信心さしてもらって、お参りさしてもろって、『参拜まきねん、御祈念おんごらひん、御取次おんとりじ』さしてもろって、できるだけ真まは大きい方がええから』という話をさしてもらって。本人もそれで、最初の間は「めんどくさいな。大変やな。信心って大変ですね」とか言って、「信心って簡単とかって言うてましたけど、大変やわ

あ「って、とか何か言っていましたけどね、でもそのうち最後の方は、「本当ですね、ちょっと横着になり過ぎてましたねえ」って、「分かりました」って、言ったことがスッと分かって。スッと分かるような子やから、パッとおかげ頂くんですけどね。だからそうやっておかげを頂いていかれてありがたいことやったなあと思ってるんですけど。

でもこれから分かるようにね、教祖様はどういう信心を氏子うぢこにしてもらいたいか言った時に、ほれ込むということ、神様に対してほれ込んだら、一生懸命なりますしね。そしたら神様もおかげ授けやすくなりますから。

神様は私たち一人一人のことをかわいいと思って下さって、おかげを

授けて下さる神様ですから、親神様ですから、しっかりとおすが継りして、ほれ込んで、別にほれ込んで裏切られるわけでもありませんしね、ちゃんと受け取っておかげにして、そりゃ一粒万倍ごうりゅうばんばいにして返して下さるような親神様ですから、だからしっかりとこの親様にほれ込んで、信心さして頂けたらいいなあと思いますね。

はい、今日もどうぞ神様から一日、白いキャンバスを頂いておりまして、背景はそれぞれでしようけれども、今日は今日で、今日の分母で、神様に心を向けて、信心のお稽古けいこをさして頂きたいなあと思いますね。いんはわが心、じんは神である。わが心が神に向かうのもって信心と

いう。その時その時、神様にお礼申したり、お断り申したり、お願いしながらね、おかげを頂いて下さい。にしても、その祈った分だけ真まことが大きいですからね。でも、お参りは大事です、やっぱりね。「神様に届くんやったら、もういいじゃないやん」「っていうんじゃないかね、」家で信心しておりますというのは信心の扱いはじめである「ってさ、そういう教えもありますけれど、同じことですよ、言わんとするものはね。」無理をするな「と言うてもそれは嘘うそじゃないんやけれども、もう血い吐きながらでも会いたいから会いに来るわって、もうそんな無理せんとしても家で休んどいてって、これも本当です。そやけど、ちょっとしんどいんやけど、でも会いたいから会いに来るわって言ったら、そろそろちの方が神様に

も心が、真が通じますからね。っていうことやなと思います。それぞれに、神様にほれ込んで信心さしてもらいましょ。今日もおかげを頂いて下さい。よくお参りでした。

(了)



津田昇平教話 第十八話

令和三年一月十八日 朝の教話

令和五年一月十九日 初版発行

発行所 金光教尼崎教会

〒六六〇一〇八九二

兵庫県尼崎市東難波町三一七―五
